

小峰城ふもとやま話

第十一話
櫓と門の名前

小峰城には18の門・11の櫓があり、それぞれに名前がありました。例えば、中に置く物にちなむと考えられる「太鼓門」「文庫櫓」、建つ場所を示す「田町門」「横町門」「前御門」「竹之丸平櫓」、特徴を示した「築出櫓」「堀に突き出た部分にある」などのほか「月見櫓」「雪見櫓」のように風流な名が付くものもあります。

一方で「化粧櫓」「藤門」「清水門」など、由来が明らかでないものもあります。

これらの、現在呼んでいる名称は江戸時代後期の「白河城御櫓絵図」などによりですが、当初は違ったものもあるようです。

例えば江戸時代前期、藩主の榊原家の転封時、次の本多家に城を渡した際の記録に「二ノ丸東御門」と記す門があります。

この門は現在の「藤門」で、同様に記す絵図があります（下図）。つまり、初めは機械的に「場所十方位」で付けられた例もあったと考えられます。

「藤門」の名は、後に付けられたようですが「郭十方位」と似た名称が複数あって紛らわしいため、個別の名称が付けられたのでしょうか。

他にも城の裏手の「和党門」は、松平定信時代に「和党曲

輪」ができてからの名称で、それ以前は花畑があり「花畑（畑）門」と呼ばれていました。

また「元太鼓門」と「太鼓門」の関係も、文字どおり「元太鼓門」がもとの太鼓門でした。

記録では、石垣が崩れそうになり別の門に太鼓を移し、その門を「太鼓門」と改めたとあります。新たに名付けられた「太鼓門」は元々「中之門」と呼ばれていたようです。

こうした、櫓や門の名称の変化も、小峰城の歴史を伝える貴重な記録の一つといえます。

文化財課 ☎2310



奥州白河城之絵図

（部分、江戸時代前期の様子を示したもの）
（白河市歴史民俗資料館蔵）

渋沢栄一×松平定信

南湖を彩る系譜

第二回
渋沢栄一と松平定信の
福祉政策

渋沢栄一は5000の企業創立に関わり、経済分野での活躍が顕著ですが、実は「東京養育院」の運営など、社会福祉事業でも大きな功績を残しています。

一方、松平定信も白河藩政と寛政の改革で、福祉政策に尽力しています。

定信が白河藩松平家の養子となり、白河に来て最も驚いたことは、他の地方に比べて極端に減少した人口と農村の荒廃でした。困窮のために生まれた赤子を育てられず「間引き」いわゆる赤子殺しをしなければならぬという、悲惨な実状でした。

定信は、間引きを防止して領内の人口を増やそうと『絹本著色受苦図』を使って赤子を殺すと地獄に落ちると、農民を教化しようとしたが、これだけでは間引きを無くせないと考え、赤子養育料を支給しました。これは二人目の赤子に、七夜過ぎに金二分、一年後に二分の合計一兩を支給する制度です。さらに8年後には、これを二兩に増額しています。

また、間引きの対象とされた女性の人口が少なかったため、白河藩の飛び地がある越後から女性の希望者を募って白河に引き取り、領内に嫁がせました。定信の家臣の記録には、天明

5年（1785）の定信の初政期から寛政期までに「三千五百余人」人口が増えたと書かれています。白河藩で一定の成果を上げたといえる定信の福祉政策は、寛政の改革の中でも行われました。

渋沢が、尊敬する定信からどのように影響を受けたかは分かりませんが、二人には社会福祉の思想という共通性がありました。



▲絹本著色受苦図（部分）（常宣寺所蔵）



▲寛政元年（1789）越後から白河藩領への行程図『白河市史』第二巻「近世」より作成

（文・中山義秀記念文学館 植村美洋）